

音楽と私

市川シニアアンサンブル 武田 利



私の音楽の始まりは軍歌でした。昭和20年の終戦後間もなく、国民学校5年生の担任に若い先生を迎えました。音楽の授業は先生のオルガン伴奏による軍歌が多かったのですが、私達の世代は軍国少年と呼ばれた名残もあり大いに歌いました。後に先生は江田島海軍予備学校出身であることを知りました。

昭和21年になると、待ちかねた様に新しい流行歌が次々とラジオから流れてきました。高校へ通った田舎道で、ペダルを踏みながら覚えたての歌を親友と二重唱したのは追憶の1ページです。

上京して在学中のある日、民放のラジオ番組で聴いたピアノの華麗なカデンツァは衝撃的でした。曲はファンタリエンソ楽団が演奏するアルゼンチンタンゴの名曲「フェリシア」でした。ここからタンゴとの長い付き合いが始まりました。アルゼンチンタンゴは19世紀末から踊りと共に始まり、20世紀には隆盛期となりました。昭和30年代に入ると、東京の街中でタンゴバンドの生演奏が気軽に聴ける様になりました。

次第にバンドネオンの迫力に惹か

れ、思い切って独逸アーノルド社製のバンドネオンを購入しました。しかし、希少楽器ゆえに指導者も少なく、当初の奏法は見様見真似でした。ここでバンドネオンについて若干説明します。バンドネオンはアコーディオンより遅れて1847年にドイツで考案され、持ち運び用のオルガンとして使われていましたが、1890年頃にアルゼンチンに渡りタンゴの主役となりました。

大きさは縦23cm、横25cm、長さ40cm（蛇腹を閉じた状態の木製の箱に、

（白黒の鍵盤ではなく、丸いボタンが左に33個、右に38個、合計71個が不規則に配列され、重さはアコーディオンの半分程の4〜5kgです。蛇腹の開閉により1個のボタンで1〜2枚の硬いリードからスタックカートに向いた鋭い音を生み出します。レガートではビブラートを出するのに工夫が要ります。

71個のボタンから出る音は、蛇腹を開いた時と閉じた時では音程が異なるので、出せる音の数は倍の142音となるはずですが、何故か20音が蛇腹開閉同音のため実音は122音となります。また、音域は71個のボタンで6オクターブとなるところですが、1オクターブが重なっているため実音は5オクターブです。

音階で示すと、低音部の左手はハ音記

号下第2加線のCから、高音部の右手はト音記号第5加線のBまであります。これにより音域はピアノ、ハーブに次ぐ広さとなります。しかし、バンドネオンは小さな箱に機能を詰め込んでいるので奏法が難しく、Webなどでは「悪魔の発明した楽器」とされています。

この様なバンドネオンを携えてサラリーマン駆け出しの頃からしばらくの間、ベテランのタンゴ愛好家による少人数のバンドに加わり、タンゴを初歩から教わりました。

そして長いブランクを経て定年後に、アマチュアタンゴダンスの伴奏バンドと元プロ数人の率いるバンドに加わり、練習や演奏会を10年近く続けました。

やがて晩年になり長年親しんできた音楽も、TVやラジオ、CD、演奏会でクラシック音楽を視聴する方向に変わりました。

今は市川シニアアンサンブルで、透明な音色の弦、豊かなビブラートの管、多様なリズムのドラム、存在感のあるピアノ、その多彩なメンバーを纏める優れた指揮者に囲まれて、バンドネオンだけでは得られなかった「合奏の楽しさ」を満喫しています。またこれが、元気の源になっています。